

ア ジ ア 養 蜂 研 究 協 会



第 2 回 AAA 大会を インドネシアで (続報)

第 33 回国際養蜂会議 (北京) 期間中の 9 月 24 日, 円卓会議場でアジア養蜂研究協会の集会を持ち, 酒井会長, Wongsiri, Verma 両副会長ほか約 60 名ほどの出席があって, 現況の報告と, インドネシア大会の準備状況が論じられた。

期待されながらも, 実際の会費納入の少ない現状を松香が報告し, 一層の協力を求めたが, 現実の問題としてはアジア各国内のそれぞれの状況も異なり, 特に外貨の送金については厳しいこともあって, まだしばらくの日和見が続くことが予想される。その点でも, 来年の第 2 回大会が関係者にとって役に立つような実績を示すことによって, 協会に参加する人たちも増えることになるだろう。

インドネシア政府は, 林業省が標記の会議を主催することを決定し, 係官 2 名が 8 月に訪日して打合せをするなど積極的である。着々と準備も進んでおり, 北京の会議では本格的なファーストサーキュラーを配布し, 協会の集会にも政府関係者 6 名を含めて出席があり, 熱心に勧誘を行った。大会の概要は次の通りである。なお, 詳細は本年 2 月に発行予定のセカンドサーキュラーを参照されたい。

期 間: 1994 年 7 月 26~29 日

7 月 25 日に受付, 26 日には親睦を深める目的を兼ねて見学旅行を行い, 27 日からセッションを始める予定を考えている。

参加料金: 当初 200US ドルが設定されたが, 北京での話し合いで, 高すぎるという意見が強く, 値下げを検討中。

使用公用語: 英語

発表申込み: 1994 年 6 月 1 日以前に必着する

よう要旨 (英語, 300 語以下) を提出する。
展示会: 3×4m のスタンドが用意される (料金未定)。出展の問い合わせ, 連絡は協会事務局 (ミツバチ科学研究所) まで。

宿泊設備等: 会場となるガジャマダ大学周辺には, 4 星クラスのホテルから, 安いロッジまで各種の宿泊施設が整っている。詳細はセカンドサーキュラー参照。

ツアー: アジア養蜂研究協会事務局では, 主催者とも連絡をとりながら, ツアーを組む予定である。ご希望をお寄せいただきたい。

主催者の連絡先:

Organising Committee of the 2nd Asian Apicultural Association Conference.

Directorate Afforestation and Social Forestry,

Ministry of Forestry,

Mangala Wananbakti Building 13 F,

JL. Gatot Subroto Senayan,

Jakarta 10270 Indonesia

FAX 62 21 573-7092, または 573-8732

TEL 62 21 573-0182, または 573-0190

なお, アピモンディアの開発途上国養蜂分科会の代表は, これまでのインドネシアの Soekartiko 氏から N. Bradbear 博士に交代が決まった。同氏がその分科会で発表した内容は, 今後のアジア養蜂の方向にも強い示唆を与えられたので, 同氏の許可を得て以下に翻訳させていただいた。

(松香光夫)

養蜂の発展と環境保全の 緊密な関係を目指して

4年前のブラジルでのアピモンディア国際会議において、私は養蜂と環境保全とはもっと強く関係づける必要があると述べた。その後、所属していた国際ミツバチ研究協会 (IBRA) が方針を変更したため、私はそこから分離独立することになり、Bees for Development (発展のために蜂を) という組織を新たに設立した。これは養蜂を地方の発展のための有効な手段として捉え、その着及、振興を助け、引いてはミツバチとその生息地の保全を図ることを目的にした組織である。

本稿で私は養蜂の発展がなぜ環境保全に結びつくのかということのを要約し、その目的で既に始まっている活動と、これから行われるべき活動についても述べたいと思う。養蜂がそれに取り組む人々にどのような恵みをもたらすかということはここではふれないが、それは人々の固有の文化、伝統が多様であるのと同じように、蜂が彼らにもたらす恵みもまた土地により、人により様々だからである。

養蜂の発展とはつまり、開発途上国に住む人々がミツバチを飼養する技術を持つことにより、かれらの生活レベルを向上させ、それを維持できるように支援するものである。養蜂がうまく行けば、それが続けられるように環境を守ろうとする気持ちを自然に彼らの中から引き出すことが可能である。

養蜂の発展と環境保全の関係:

- 世界の経済最貧国で、都市以外の地域に住んでいる人々とは、言い替えれば自然環境の中に暮らしている人々である。養蜂の発展はかれらのためのものであるが、彼らにはやっても甲斐のない養蜂であれば、あえてそれに取り組む時間も資源の余裕もない。
- 地方の人々をとりまく自然環境は生物的多様性に富むことが多いが、その残された自然には現在消滅の危機が迫っている。
- 広範囲に行われている伝統的養蜂は、広く分

布している在来の植物に依存している。

- 熱帯林から持続して収穫可能な生産物の重要性についてはしばしば専門家も言及するが、実際には環境に悪影響を与えずに収穫でき、且つ高い市場性を持つ必需品は多くない。そのなかで養蜂は数少ない経済性のあるものを生産できる活動であり、在来の昆虫 (ミツバチ、ハリナシバチとも) と植物のみを活用しているのである。

- 養蜂家なら誰でも共感してくれると思うが、蜂を飼うことを通じて、我々の環境への尊敬の念が生まれ、環境のしくみに興味を持つようになる。ミツバチは特に西洋では、広く好まれている数少ない昆虫なので、人々の興味をひきつけやすいメリットがある。

- 地方を中心とした活動であるから、養蜂は人々が地方から都会へ流入しようとするのをとどめる経済要因の一つとなる。

- 在来のミツバチの数を維持すれば、付近の作物の花粉を確保することになる。作物の収量の増加が望めるとなれば、経済的観点から人々のミツバチに対する関心も高めやすい。

近年、ブラジルの Kerr 教授は保護を必要としている 300 種のハリナシバチへの注意を喚起しており、Verma 教授はトウヨウミツバチの絶滅への懸念を示しておられる (本誌 頁参照)。これらの場合でも、そこに住む人々がこの種の蜂の価値を認めてくれれば、その保護対策も進めやすくなるものと思われる。

進行中の活動:

1989 年のブラジルの国際会議以降、歓迎すべき、いくつかの新しい取り組みが始まっている。

- ミツバチと樹木をテーマにした会議がヨーロッパで数回開催され、森林と養蜂の関係者が参加している。関心を持つ人々の非公式なネットワークがつくられつつある。

- アジア養蜂研究協会をはじめとして国際的な組織がミツバチの保全は重要課題であり、強い関心を持っていると表明している。

- 森林で暮らす人々を対象にした新しい出版物

が出され、伝統的な、森林の暮らしにもとづいた蜂の飼養法を改めて紹介、奨励している。

・持続可能な、発展のための養蜂を奨励、支援する新しい組織、Bees for Development の発足に対し数多くの信頼と激励が寄せられた。

しかし、残念ながら国際的な先導的計画の成功例として期待された熱帯森林行動計画からは、予想されたほどの成果を見ていない。一般的に大規模な提案は大きな解決をもたらしてはいないようである。むしろ、ある共通の目標に対して数多くのグループが協調しながら、小規模な活動を進めていくうちに、確実な前進が見られるのではないだろうか。

横のつながりを強化する動き：

次に、さきにふれたこれらの活動に関心を持つ人々を結ぶ非公式のネットワークについて、それは実際どのようなものか、なぜ重要なものか、何が出来るのか、あるいは、そのネットワークで得たものをどの様に外にまで広げて行けるのか、もう少し詳しく説明したい。

今はまだ萌芽の段階であるが、もともとは昨年オランダで開催された NECTAR の会議、「ミツバチと樹木」の出席者が中心となり、1992年に行われたタイ、西アフリカ、トリニダードトバコの会議で提案された色々な考えについて意見交換をしていこうとしている。

このネットワークは現場で働く人々の多様な経験に着目し、その生の声、意見を多くの人に明確に伝えることを目的とし、更にそれによって政策決定者や資金援助組織への影響力を増すことを目指している。

主な活動としては以下が考えられる。

1. ネットワークは各種国際会議や個々の通信を利用して、力を注ぐべき計画はどれなのか意見をまとめる。先ず第一歩としては、大きな会議の場でこのネットワーク作りをその会議の部会として認めるように働きかける。私は来年インドネシアで開かれる AAA の大会に対し、「養蜂の発展と環境保全」というセッションを開くことと、その会議には直接のミツバチ関係者以外の人も参加できるようにと提案したい。

2. 私たちの意見を明確に伝えられる出版を続けなければならない。Svensson が著した *Bees and Trees* のような正式な報告書はもとより、*Beekeeping & Development* 誌でも継続して関係記事を載せて行き、ネットワークの方針と活動についての最新の情報を伝えたい。

3. ネットワークは資金提供団体にたいし、養蜂を含む総合的な地方開発と自然の保全のための計画の実現に必要な資金の援助を行うよう働きかけなければならない。「養蜂の発展と環境保全」という関係を明確に示せるモデル計画を選定し、これに的を絞って援助を要請する。

4. 民間活動団体 (NGO) の自然保護関係組織に対し、在来種のミツバチ、ハリナシバチ及び養蜂についての関心を高めてもらうよう運動する。重要と思われる NGO をリストアップし、共同して活動できるよう働きかける。

以上養蜂と環境保全とのつながりを強めるいくつかの考えについて述べた。私たちは現時点では、在来種の蜂を絶滅の危機に追いやり、新しい病気を持ち込んで蔓延させたり、在来植物に悪影響を与えたなどの、世界の蜂の分布に対して人間が起こしてしまった破壊的な活動を押しとどめるところには至っていない。しかし、これまでの経験から多くを学び、全力をあげて蜂の種の保存とその環境の保全に勉めなければならない。このためには、そこに住む人々が持続してその環境から収穫を続けられるという点を踏まえた総合的な地方開発を進めることが重要であり、養蜂を中心にした開発こそはその最良のモデルとなりうるのである。

BRADBPEAR, NICOLA. *Honeybee Science* (1994) 15 (1): 45-46. Promoting the link between beekeeping development and conservation. Bees for Development, Troy, Monmouth NP5 4 AB UK (翻訳: 榎本ひとみ, アジア養蜂研究協会)

Translation from the manuscript for the Proceedings of 33rd International Congress of Beekeeping, Beijing (in preparation).

本稿は第 33 回国際養蜂会議総集録 (準備中) 用の原稿を著者の許諾の得て翻訳したものである。